

## まちづくり懇談会 中野方

日時：平成 29 年 11 月 9 日（木）午後 7 時～8 時半

場所：中野方コミュニティセンター

---

### 4. 「はたらく」「たべる」「くらす」の政策について

■市長 中野方町は平成 17 年 1896 人だった人口が平成 28 年は 1626 人。世帯数 500 が平成 28 年に 541。恵那市全体では 1 世帯当たり 2.8 人だが、中野方町は平成 17 年に 3.8 人だったのが平成 28 年に 3.0 人。恵那市全体の平均より若干多い。市全体と中野方町の人口推移は、平成 17 年を 100 とすると平成 28 年は中野方町は 14.2%減。恵那市平均 9.6%減。平均より下がっている。出生数は、平成 17 年に 7 人生まれ、その後 10、10、14、13、14、9 で、24 年は 15 人、26 年以降は 4、6、5 で非常に減っている。出生数は、元々変動幅が大きいですが、26 年以降は減っている。

中野方町の特徴。担当がいろいろ調べて作ってきた。まめに暮らそまい会。町を挙げて取り組んでいることに敬意を表したい。ほかの町にはない取り組みなのでこれを大事に伸ばしていただきたい。坂折棚田。棚田百選にも選ばれている。田の神ともしび祭りも毎年僕もお邪魔している。オーナー制度による稲刈りなどの取り組みもされている。ふるさとをこの中野方に持ってくるには大変いい取り組みだと思う。一生懸命支援していきたい。不動の滝やさいの会。平成 23 年に元気発信で厨房を少し拡大された。最新データで、出荷者 60 軒の農家、従業員 20 人。お弁当を頼んだり、僕もいろいろなところでお世話になっている。非常に活発にやっぴらっしゃるので、引き続き支援したい。木の駅プロジェクト。改めて言うまでもないが、集まって木を集めている。出荷量が最新データで 438 t。登録者 100 人。バイオリンとマンドリン。私も仕事のとときからずっとかかわらせてもらった。今年は中野方小学校の子どもたちにバイオリンを習っていただいたのを見に行った。大変すばらしい取り組みだったし、中野方町にはマンドリンクラブやバイオリンクラブというのを社会人がされているということで、こんなに楽器を作っている町はほかにはないので、恵那市だけでなく、日本中でも珍しいと考えていただいている。

地籍調査。中野方の入口でいよいよ 29 年からスタートする。要望いただいたので、中野方の中も順に地籍に入りたい。68 号、71 号の排水。県道中野方七宗線に絡めて排水を先にやるということで、全体での概算事業費が今 3800 万円。完成は平成 33 年ぐらい。今

年度は117m施工する。七宗線も併せて改良の予定で今用地を行っているだろう。林道。笠置山頂上の林道の工事も、26年測量設計、7、8、9年と本当に少しずつ、300万円程度、順に進めている。笠周計画に載っているので手順に沿ってやっている。笠置山栗園。全体の植栽は今年度で完了し、残務の事務手続きが少し残っているが、ほぼ完成しこれから収穫になる。日本でも珍しい取り組みだ。十分ピーアールしいろいろな方に見ていただきたい。

中野方町の農地、201ha、耕作放棄地28ha。13.93%。恵那市全体で13.34%なので大体同じ割合。

振興計画の進捗状況。笠周地域の振興計画が策定されたとき、中野方町として位置付けられた事業がある。棚田でなごみの家の整備は完了。笠周地域の観光マップも26年に完成。グリーンピア恵那の跡地の観光農園の整備は、今協議をしている。ふるさと活性化協力隊の配置は、まちづくり推進員として2名に入らせていただいている。川向林道も実施している。県道中野方七宗線の整備も、県事業として順次取り組んでいる。

## 5. 意見交換

■司会 空き家対策委員会おんさい中野方がこのほど町内全戸に実施した中野方の将来における家、農地、山の管理についての意向調査結果について、中野方町の10年後を示唆するものでもあるので、先にまちづくり推進員の大江すみえさんから報告する。

■中野方まちづくり推進員空き家対策委員会おんさい中野方・大江 中野方の将来における人・家・農地・山林の管理についての意向調査の結果について説明する。

アンケート実施内容について。アンケートの目的は中野方の人口減少における町の姿の現状と将来を数字などで見える形にして把握すること。特に、空き家だけではなく農地、山林の資産管理を各世帯や町が真剣に考える資料にするために調査を行った。アンケートは中野方全世帯を対象に6月に配布、7月に回収、8月、9月で集計を行った。その結果、回収率は84%なので概ね参考になると考える。

アンケート結果。中野方の人口がどのように減少するかを把握するため、現在と10年後の家族構成について調査した。年代別で見た構成員はグラフのようになる。10年後の構成員はこのように減少する。10年後、65歳以上は1割減少にとどまるが、19歳から64歳では3割減少、0から18歳では今後の出生にもよるが4割減少する傾向にある。また、10年後は65歳以上が19歳から64歳世代よりも構成員数が多くなる傾向にある。

男女別で見た構成員は下のグラフのようになる。現在も10年後も65歳以上は男性より女性が多い傾向がうかがえる。

どれぐらいUターンを検討しているか。Uターンを検討している世帯が全体の8%、22世帯。さらに、Uターンしてもらいたい世帯は18%。仮に22世帯が戻ってくれば、1世

帯平均3人としても66人の人口が増える。人口が増える以上に、特に若い世代が戻ってくれば、小学校の児童数が現状維持できるだけでなく、町への経済効果は大きい。

住まいの現状と将来について。どれくらい空き家が増えるか。10年後空き家になっているかもしれないとの回答が21%、78世帯。空家になる可能性がある世帯のうち、そのまま放置するとの回答が16%、他人に貸しても売ってもよいという回答は23%にとどまる。今後空き家を放置すれば、崩壊、動物や犯罪の巣になる可能性もあり、ご近所にとっても迷惑になり兼ねない。活用できる空き家は空き家バンクに登録し、空き家の活用を推進していく必要がある。

農地の現状と将来について。農地をどれくらい維持できるか。その結果、全世帯のうち7割が農地を保有していて、10年後も自分で農地を管理できるとの回答が3割。管理できない農地が増加、遊休地になるとの回答が合わせて半数以上になる傾向にある。

今後活用できない農地について、そのまま放置するとの回答が3割、組合や法人、次の担い手に貸す、または親戚や集落の人に貸すを合わせると7割になり、ほとんどの人が誰かに委託していく。

山林の現状と将来。山林がどれくらい維持できるか。全世帯の7割が財産区貸与地も含めて保有している。うち、10年後も管理できるとの回答は14%、管理できない山が増える、今もほとんど管理していないとの回答が合わせて7割以上。

管理できない山について、そのまま放置が2割。山林経営主体があれば貸し付けても良い、または管理方法を町の方針に委ねるとの回答が6割。自分では山を管理しきれない傾向がうかがえる。

以上から、中野方の人・家・農地・山林の10年後の将来について見えてきたことは、人について、10年後、高齢者の見守りが増えたり、自治会活動に支障が出てくる可能性がある。65歳以上の人には元気な高齢者であってくれることが大事。そのためNPO法人まめに暮らそまい会が拠点を持ち、介護予防に力を入れて活動している。一方で、人口減少していくことは仕方のないことだが、現状維持から緩やかに減少に止まるよう、若い世代の受け入れをしていく必要がある。さらに、Uターンを検討している、Uターンしてほしい世帯が合わせて3割程度あることから、同居への後押し、または住まいの確保、働く場などの充実で中野方に戻ってきたい人を定住に導くことが必要。

家について。10年後空き家になっているかもしれない世帯が21%、78世帯あった。10年後、5軒に1軒は空き家のある中野方町の風景を想像してほしい。まずは空き家にしないこと、空き家になってしまう可能性があるなら、誰かに譲り、中野方に戻ってきたい、Uターンしたい人、あるいは町外からの移住者、Iターンなどを受け入れていく町民の意識が大切。そのために空き家対策の活動を継続し、空き家を活用することの普及が大事。

農地について、10年後、自分で管理できるのは3割程度。そのほとんどが組合・法人

等に委託していく傾向にある。耕作放棄地を増やさないように農業振興協議会が中心となり耕作放棄地対策を継続していく必要があり、農業組合法人アグリアシスト中野方などの運営の継続が農地をいかに維持できるかが鍵になると考える。

山林について、10年後は管理できない山林が7割を超える。しかし農地のように組合や法人などに委託する先がない。管理できなくなる山林をどうしますかとの質問に、半数以上の世帯から、町の方針に委ねる、または誰かに貸し付けてもよいとの回答があり、町として、管理できない山の管理をどうしていくのかを今から検討していくことが必要。

以上が中野方の人・家・農地・山林から見た将来像。この将来像を見据えて、町民も市も、10年後どのような中野方町にするのか、この10年間のまちづくりがとても重要になる。中野方には法人格を有する団体が5団体ある。この5法人が連携しまちづくりを進めるために動き出した。今こそ地域と行政が一体となって中野方のまちづくりを進めることがとても重要だと考えるが、皆さんいかがでしょうか。

■司会 市長説明の「はたらく」について、中野方農業振興協議会会長鈴木せつおから発言する。

■中野方農業振興協議会会長・鈴木せつお アグリアシストの代表もしている。

中野方町農業振興計画の中では笠置山栗園の造成、坂折棚田の維持進行為最大の計画となっている。16haを超える大きな栗園の完成、棚田ではなごみの家の完成で、それぞれ市が大きな力を添えてくれたことに感謝する。今年度、中野方町一円を獣害保護策をしようと検討している。町内一円ということで町で推進していきたいと提案して進めている。全長26km、資材事業費4千万で、将来考えられるシカを念頭に、イノシシ等も含め、獣害を未然に防ぐことで農地の荒廃化を少しでも遅らせるというか、止めるということになるし、シカの被害で困っているところに聞くと、農地がフルシーズン活躍してくれて壊れてしまうということで、農家の意欲の減退が言われている。そういうことでこういう計画をしている。また、アグリアシストが今受けている面積は年々増えていて、水田の状況も悪いので、暗渠排水の工事を市にお願いして計画に入っている。併せて、未整備農地を請けているので、そういうところのほ場整備も計画に入っている。こういったことは、大型機械で作業効率を高めるといことと、農作業の軽減を考えているが、将来的に、アグリアシストへの期待感も、自分たちもひしひしと感じているので、そういう部分についても後継者を作っていくことが大事だと思っている。こういったことをやって後継者が残ってくれると思っているが、中野方も含め、市全体の後継者のあり方について、これからどう市長が推進するのか聞きたい。

もう一つ、次年度から自主生産調整が始まるが、恵那市は29年度まで生産調整は未達成だと思う。未達成な市が自主生産調整をどう進めるのか、不安だ。それも併せて聞きた

い。

■市長 農業、特に後継者の話があった。おっしゃる通りだ。僕も家に田んぼが6反ぐらいあるがとてもやれていない。いくつかの理由があると思う。粟、トマトが、1反あたりの収益は大体決まってくるが、米は1反当たり10万ぐらいだ。とてもそれで人1人が食べていけないというのが抜本的な問題だ。そのために、僕は農業がきちんと仕事として、もしくは産業として、もしくはなりわいとしてやっていけるだけ、儲かるように作るのが大事だと思っている。それをいろいろ探してみようと、恵那農高もそうだし、トマトの紹介もした。そして、規模によっては粟でもいけるんじゃないかと思っている。まずこういった取り組みを一つしてみようということだ。

それから、今言われたように、機械、集団化で、農業法人としてきちんと請けていく仕組みも片方で大事だと思っている。営農組合、営農の組織は今恵那市中で生まれていて、そういったところに対しての助成、補助の制度がずい分生まれているので、そういう取り組みがまず一つ重要だと思うし、それに合わせて機械の導入の補助の制度もできているので、そういうものを活用しながらいくのかなと思っている。

遠い将来に向けての可能性は、ITが出てくると思う。こういったところも機会があればどこかで実証実験などに取り組んでいきたい。

生産調整のことはほかの地域の懇談会でも出た。来年度以降どうなるか。県では11月中には来年の方針が出てくるんじゃないかということで、恵那市の農業担当は結果を待っている。生産調整そのものは県全体の中でクリアしているし、恵那市全体の中でも、確か、調整がうまくなされているので、各地域ごとでは調整がうまくいかないケース、もしくはクリアできないケースもあるが、全体ではクリアしていると聞いている。

■司会 「食べる」について。

■中野方子ども園保護者会会長・柘植しげお 中野方子ども園では保護者会を中心として、保育園から子ども園に変わる際に、外部搬入給食の話が最初あり、それを何とか自園給食を継続したいというところで、26年頃からは地域協議会を含めた、地域を含めた取り組みとして活動している。今でも年に数回会議を開き、親子への取り組み等活動している。今、自園給食で子どもたちが非常に楽しく、地域の方と接するという含めで行っているので、このまま自園給食を継続してほしい。小坂市長に代わったときには、自園給食から、給食化というところはほとんど話を聞くことがなくなり、このまま自園給食を続けていけるんじゃないかと理解しているが、確認したい。

■副市長 神尾さんがこちらにみえたときに、私が総務部長のとき、議論した。子ども園は自園調理ができる施設にしている。それを違う方向にするという議論は全くない。自園調理なのでぜひ地元の食材、地元で活用する機会をもっと増やして、自園調理の良さを続



けていくためのピーアールも地元としてやってほしい。

■司会 「暮らす」について

■空き家対策委員会おんさい中野方委員長・柘植健治 市長からきめ細かい説明をいただいた。いい政策をやっていると感じている。打ち合わせとちょっと違うが、市長など市の方に何かしゃべれということだったが、かえって今日来てみえる中野方町民に、先ほどの大江さんの報告を本当に真剣に考えてもらいたい。先だって、広報にアンケートの結果を全部配布したが見てくれたか。10年後を示唆する中野方のアンケートの結果だ。人口は65歳以上は1割減る、働き盛りの方は3割、本当の若い人は4割も減る。これは、自分たちの答えたものをまとめたものが現実だ。農地の問題も、ああいうものが本当に現実だ。本当に真剣に、町民が考えて、本当にどうするか、真剣に考えてもらいたい。いろいろな活動、たとえば棚田の活動、まめくらの活動など、本当に真剣にやっている人はやっているが、皆さん町全体で考えていかないと、やばいことになる。

冒頭に、市長が多治見の住宅団地、土岐の住宅団地ができて人口が減ったと言われ、恵那市の正家第二区画整理でも住宅メーカーが60戸の団地を造ると言っているが、それを造っても減るとするのは、周辺が減るので減っていくということだと思う。せっかく取ったアンケートなので、もう一度家に帰って見ていただき、どうするか考えてもらいたい。

■司会 おんさい中野方の調査結果を先ほど報告してもらった。市長の感想を聞きたい。

■市長 かなり数字的には厳しいがおそらく現実だろうと思っている。特にこの地域は交通の便、駅からの時間などを考えると、どうしても減ることになるだろうと思う。ただ、中野方町ならではのアンケートの取り組みだ。まめくらで取り組んでいること、中野方のギフト、これができる場所は恵那市内のほかのまちにはない。そういう意味で、プライドを持っているし今までも取り組んでいるし、それは必ず実を結ぶと思う。今柘植さんが言われたように、これに危機感を持ってまちのみんなで考えるべきだと言える人がなかなかいない。中野方という地域はなかなか厳しいと思うが、今取り組んでいる皆さんの姿勢を見る限りは大丈夫だというのが印象だ。

全体の話をする、栗園、まめくら、恵那柿などいいものがたくさんある。これを伸ばしていくべきだ。期待したいのは、中野方が人口が減る日本の中で、何に取り組んでどう乗り切ったかという一つのモデルができる地域だと思うので、それに取り組んでもらいたい。人口が増えていくときは、東京、名古屋が最先端のモデルだと言われたが、人口が減っていく中でどういう減り方をしていくか、もしくはどういうたたみ方をしていくかがうまくできるところがこれからの最先端の町になる。そこでいかに皆さんが幸せで元気でいつまでもここにこしてそこで暮らせるかということが、ほかのまちにはできないことだ。10打数10安打というのは絶対不可能だ。3つ当たればすごい。1つでも当たればいいと

いうぐらいのつもりでいろいろなことにチャレンジして取り組んでもらうことが、中野方モデルを作る一つのいいパターンになると思う。すごく期待している。

■司会 市長から今見せていただいた中野方町のギフトセットのチラシは、これから町民に配るものだ。もうできている。これから広報と一緒に配る。ふるさと文化まつりでも共通の包装紙を作る。どんな柄がいいのかシール投票していただいている。

柘植健治さんの発言に関係して何かないか。真剣に考えている人はあるか。具体的に自分はどう動いたらいいかという思いはあると思うが。まちづくりに一人一人が真剣に取り組んでいくと何とか乗り越えることができるのか。

まめに暮らそまい会の井戸もりおさん、発言があれば。

■まめに暮らそまい会・井戸もりお 市長から「くらす」の部分でまめくらを紹介してもらった。福祉の事業をやっている。中野方の高齢化率は40.2%。65歳以上。後期高齢者75歳以上が21.2%。これから確実にそういう人が増えてくる。われわれはそういう方々の自力で元気な暮らしが生涯できるような後押しをしようと活動している。脳のいきいき教室をやっている。高齢者が脳の活性化をして認知症の予防をする。健康教室では、手足を丈夫にして自分の体をいつまでも健康寿命を延ばせるように後押ししている。28年度はその指導に当たってくれる資格のある人が恵那市から26回来てくれた。高齢者はそれで本当に元気で、その成果が表れてきている。杖をついて来た人が杖を忘れていくほどだ。高齢者がそういう教室を楽しみにして来てくれている。そんな中、29年度はそういう資格のある指導者を年に5回しか出せないという話に来て、非常に残念だ。中野方町だけをそんなに優遇できないという話だ。そういうことなら、このままその教室を置けないので、今われわれのスタッフが自分たちで勉強して高齢者に教えている。専門家とわれわれの指導は違うので、来てくれる人も減少している。そういうことがないようにしてほしい。

市の28年度の決算をこの前見た。民生費として4分の1が使われていて有り難い。その内容が分からない。高齢者は高齢になれば病院などの医療機関にお世話になることになる。その前に今元気な人たちをいかに元気にするかという、予防対策をした方が、本人も行政もメリットがある。

■市長 指導者の回数が減ったのは、行く先が増えたので相対的に減った。期待を裏切り申し訳ない。担当に確認する。

予防について力を入れた方がことはその通りだ。いろいろな人に話を聞くと、予防に力を入れた方がはるかに効率がいいということだ。特に医師、歯科医、専門の人もそう言っている。今までも国民健康保険も含めて予防事業は一生懸命やっているが、今まで以上にということは十分承る。何ができるか検討する。アイデアがあれば寄せてほしい。

■鈴木今衛 今度農泊事業に取り組んだ。この辺では中野方だけだと思う。本来なら行政が「農泊事業があるので手を挙げてください」と言うのが筋だと思うが、こちらで勝手に

農水省に申請した。6月に要望して10月の終わりに採択された。今慌てている色々な事業に取り組んでいる。その中で、東海農政局に向かったヒアリングの中で、地元の行政はどうですかという話があった。私どもは、「こんないいことには市役所は黙っているわけではない、絶対協力してくれる」と言ってきた。採択されたことは市役所に報告に行ったが、忙しいからということで、あまり積極的ではないようだ。本来なら行政が私たちを引っ張っていってもらわないといけないという思いがあるが、行政の立ち位置はどうなのか。

■市長 その話は初めて聞いた。申し訳ない。農泊もしくは農家民宿の話はこれからすごく可能性があると思っている。最近読み始めた本の中で、イタリアの田舎町の話がある。農家民宿もしくは週末に農家や田舎に行って泊まってくるというのが地域の活性化とビジネスと国内全体での農地の荒廃を防ぐという事例が出ている。これを応用できないかと思って本を読んでいる。研究をする会を持ちたいと思っているところだ。農泊でどんなことに皆さんで取り組もうとしているかぜひお知らせいただき、一緒になって勉強させていただきたい。

■司会 担当の農政課には話は行っていると思うのでよろしくお願いします。

これで意見交換を終了する。今回の懇談会をまちづくりに生かしていきたい。

## 6. 市長お礼のあいさつ

■市長 遅い時間までお話をお聴かせいただきありがとうございました。今日のことを参考にして恵那市のまちづくり、中野方のまちづくりに取り組んでいきたい。言い足りないことがあれば振興事務局長を通じて聴かせてほしい。皆様の話を聴いて少しでもできることからやっていきたい。いろいろな考えの中でいいまちづくりができていくと思う。引き続き声をお届けさせていただきたい。

■中野方地域協議会副会長・神尾かずみ 市長の話の中に、中野方町に生きていて良かったというモデルのまちづくりにしたいということがあった。私も強くそういう思いがする。地域協議会でもそういうことにまい進したい。本日はありがとうございました。

[ 閉 会 ]